



浴槽で発見された日記／
(1961)／スタニスワフ・
レム（深見弾訳）／集英
社（9/25刊・¥1,200）

『ソラリス』がドストエフスキーで、『浴槽』がゴンブローヴィッチだ、などと書く
と、あまりに図式的にすぎるだろう。ただ、本
書に示された混沌と、自己の探索という主題
——本当のものは何なのか、本当の指令はど
こにあるのか、本当の自分とは、一体何者なの
か——は、たしかに、ポーランドの亡命作家
ゴンブローヴィッチと通じるところがある。

この物語には、暗号が溢れている。冒頭に
提示される、未来人が下す見当違いの解釈も、
実は、本書を彩る暗号の一環でしかない。英
米SFを見慣れた、われわれの目からすると、
未来に発見された過去の日記、というスタイ
ルは、ありふれたものの一つである。だから、
序章の設定は、後の物語を読むうえで、いさ
さか誤解を与えるかもしれない。だが、これ
は、カオス全体を括弧でくくり、それもまた
謎とした、レム流の手法に他ならないように
思う。そして、ゴンブローヴィッチと同様、
本書の『謎』には、政治や宗教風刺といった、
現実の影も窺える。レム自身認めているわけ
ではないし、社会状況の影響は推察するほか
ないのだが、ポーランドの当時の状況を、無
視することは、やはりできない。